
Y 氏に告ぐ

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Y氏に告ぐ

【Nコード】

N52910

【作者名】

麦子

【あらすじ】

小学生の女の子と自称ストーカーのちょっと変わったお兄さんとの夏のお話。

1、とある夏の夕方

夏休み前日。石でも入っているかのようにずっしりとしたピンクのランドセルを背負って、いつものように薄暗い路地を駆け抜けた。わたししか知らない秘密の近道。そこを抜けると雑草で荒れ放題の空き地がある。

今日もいた。

七月にはいつてから、学校の帰り道に毎日見かける高校生くらいのお兄さんは今日も、空き地の真ん中にぼつんとある古びた木の椅子に姿勢悪く座って真っ直ぐとどこかを見つめていた。お兄さんの真っ黒な瞳の先には、コーヒー牛乳のような色をした屋根の下、二階のベランダが見えた。

「お兄さん、何者？」

人気がない夕方の空き地に、わたしの声がポンと響いた。お兄さんはわたしを見てちょっと驚いたような顔をしてから、腕を組んで考えるような素振りをしてみせた。そして、にやりと笑って一言。

「俺、ストーカーなんだ」

電柱のそばにあった“不審者に注意”の看板を見つめて、もう一度お兄さんを見つめる。ランドセルにぶらさがっていた防犯ブザーを

ぎゅつと握り締めた。吹き出すような笑い声が聞こえて、少しムツとする。

「何年生？」

「…六年」

「この辺の子？」

「知らない人に住所は教えちゃいけないの」

「物騒な世の中になったもんだ」

お兄さんは、まるで他人事のように頷いた。

「名前は？」

「知らない人に名前を教えてちゃいけないの」

「ガード堅いなー。んーと、じゃあさ、俺が付けてもいい？きみの名前」

「うん」

「ろく、なんてどう？」

「ろく？」

「六年生だから、ろくちゃん」

「かわいいね」

「だろ！」

小学生の社交辞令に本気で喜ぶお兄さんは椅子をガタガタと揺らして笑った。

「俺は爽太郎」

「お兄さんの名前？」

「そう」

「なんで教えてくれたの？」

もしも本当にこのお兄さんがストーカーだったら、わたしみたいな赤の他人に本名を知られたら後々まずいのではないのだろうか。それとも偽名？

「知らない人から名前を教えてもらっちゃだめ、っていう決まりごとはないだろ？」

得意げに口角をあげた“ソウタロウ”は、またコーヒ―牛乳色の家のベランダをぼんやりと見上げた。わたしも真似をしてぼんやりと見上げてみる。

夏休み前日、ソウタロウと名乗った不思議な雰囲気を持つお兄さんとはじめて会話をした。

2、お腹が空く夕方

コーヒー牛乳色のお家には、爽太郎の好きな女の子が住んでいるらしい。今日もオレンジに染まりはじめた空き地にて、爽太郎はストーカーらしきことを続けていた。友達の家からの帰り道にひよっこりとここに立ち寄ったわたしを笑顔ひとつで迎え入れてくれた爽太郎。今日は防犯ブザーを持ってこなかった。

「あそこの二階が、幸子の部屋なんだ」

サチコ、とは爽太郎のストーカー相手の女の子の名前らしい。リスみたいに小柄で頭を撫で回したいくらい可愛い人、らしい。でも、恋はモウモク、だから実際のところサチコの容姿は謎のままだ。

「ベランダがあるところ？」

「そう」

「爽太郎は、いつからサチコを好きなの？」

「ずーっと昔から」

「ストーカーの片想いも大変なんだね」

「ばーか。俺らは元々両想いな」

「ストーカーはみんなそう言うんだよ」

「マジかよ、こわいな」

爽太郎は、また他人事のように頷いた。

「なあ、ろくちゃんは夏って好き？」

「わりと好きだよ。暑いけど、夏休みもあるし。たくさん遊べるし」

「俺はね、夏が一番好き」

「なんで？」

「だって、夕方の時間が長いじゃん」

「夜になってほしくないの？」

「夜は暗いしこわいから、苦手なんだよ」

「怖がりなんだね」

「そう。だから、ストーカーしてる時間も夕方限定なの」

「変なの」

爽太郎は毎日毎日、この夕暮れ時の空き地で壊れそうな音が鳴る椅子に座って飽きもせず、サチコを想いつづけている。何をするわけでもなく、ただじっと息を潜めるようにして二階のベランダを見つめているのだ。真夏だというのに、長袖の紺色カーディガンを涼しげに着こなして、真っ直ぐとサチコを好きだと言った爽太郎はかっこよかった、ストーカーなのに。変なの。

「ろくちゃんここの所、毎日俺のとこ来てんね」

「爽太郎の隣はなんだか涼しいから」

「避暑？」

「今年の夏は猛暑らしいから」

「なるほど」

それから、爽太郎はサチコの話をする時、あのコーヒー牛乳色の家を見上げている時、いつもやさしい笑い方をする。わたしは、スト

「カーと呼ばれる人たちはみんな不気味で下品な笑い方をするのだ
と思い込んでいたから、こんな笑い方をするストーカーもいるのだ
ということを知り合っただけで知った。」

椅子の上に立つて、爽太郎は鼻をクンクンと犬みたいに動かした。
猫を七匹買っている谷村さんの家からカレーの匂いがする、と爽太
郎は言った。

「腹減ったなあ」

爽太郎のお腹の音を聞いていたら、今すぐに家に帰って夕飯を食べ
たくなった。

「暗くなる前に帰りな」

椅子の上に立つたまま爽太郎が呟く。爽太郎の黒い髪の毛が夕日色
をしていて、思わず見入る。不思議なくらい爽太郎とこの夕方の空
き地は溶け合っていてとても絵になっていた。

「爽太郎は帰らないの？」

「俺は、まだ帰るわけにはいかないんだ」

また明日も来てあげる！

走りながら叫んだら、爽太郎は仕方ないなあって顔して苦笑いをし

て
い
た。

3、ラムネ色の夕方

昼間の空き地には爽太郎は現れないということが判明したのはつい最近のこと。青空の下の空き地には古びた木の椅子だけがぽつんと置かれているだけで、その光景はなんだかひどくもの悲しかった。

わたしは、夏休みに入ってからほぼ毎日夕方になると爽太郎のいるこの空き地に足を運んでいる。今日は駄菓子屋さんで買ってきたラムネを二本、ミニドーナツツ四個入りを持って空き地を訪れた。ラムネを爽太郎に渡すと、眠たそうな黒い瞳をぱちぱちと瞬きさせて、カーディガンで隠れていた手のひらでゆっくりとラムネを受け取った。

「ろくちゃんを買ってきてくれたの？」

「うん。昨日お小遣いもらったから」

「おおー。最近の小学生は太っ腹だなあ」

ありがとうと笑った口元で、爽太郎は豪快にラムネを飲んだ。カラカラとビー玉が涼しげな音をたてて、ラムネのビンの中で転がっている。

「ラムネって、プールみたいだよな」

「そうかなあ」

「うん。ほら、太陽の光に当たるとき、キラキラしてて、プールの色に似てる気がする」

「もう夕方だから、オレンジっぽいけどね」

「確かに」

コロコロ、コロコロ。

透明な水色でコロコロ泳ぐビー玉みたいに、爽太郎はコロコロと表情を変えて笑う。

ラムネのぱちぱちした味が喉の奥で弾けるたびに二人で爆笑していたら、犬の散歩をしていたおばさんに凝視されてしまった。

「爽太郎、変な目で見られちゃったよ」

「ろくちゃん、ドンマイ」

「爽太郎もでしょ！」

他人事のように笑い飛ばされるから、どうしてもよくなってしまふ。

爽太郎の笑顔には不思議な力があるのかもしれない。

爽太郎にビー玉をあげると、嬉しそうに指でつまんで夕焼けのぼやけた光に当てていた。

なんだかそのビー玉が、爽太郎みたいだと空っぽになったラムネを握り締めながらぼんやりと思った。

4、はじめての告白

八月に入り夏休みも残すところ半分となったとある日。学校のプールで泳いできた帰り道、同じクラスの男子に呼び止められた。真っ黒に日焼けした顔がほんのり赤い。

「お前のこと、好きなんだけど」

大きな声で告げられたはずなのに、蝉の鳴く声にかき消されそうな感じだった。突然の告白にぐちゃぐちゃになる頭と心の中に、何故か爽太郎の姿が浮かんだ。

「わたしをストーカーできるくらい、好き？」

同級生の男の子は顔を顰めて、は？と言った。わたしも、は？と言いたかった。口から勝手に出てしまったのだ。きつと、全部爽太郎のせいだ。

「ストーカー？普通に考えてありえねーし、キモいだろ」

「うん、そうだよね」

「でも、お前のことは好きだ」

「わたしはストーカーをキモいっていうあんたのこと嫌いだ」

じゃあ、もういいよ！

男の子はぐつと唇を噛んで、大げさに叫んで走り去っていった。悪いことをしてしまったのかもしれない、きつと傷つけた。せつかくわたしのことを好きって言ってくれたのに。でも、爽太郎のことを気持ち悪いって言われたみたいで腹が立ったんだ。爽太郎は、そんな人じゃないんだもん。

なんだかすごく、すごく爽太郎に会いたくなった。

涙が出そうになるのをグツとこらえて、わたしは走りだした。爽太郎がいるあの空き地に向かって。もうすぐ夕方になろうとしていた。

5、君がいない夕方

髪の毛をばさばさ揺らして秘密の路地を通り抜けた。夕焼け色の空き地には、爽太郎の姿はなかった。

爽太郎の特等席には、見知らぬお姉さんが姿勢よく座っていた。凜とした横顔が夕日に照らされている。

このお姉さんは、きっと、サチコだ。理由なんてないのにそう思った。

お姉さんがわたしに気付いて、椅子からゆっくりと立ち上がってふんわりと笑った。「どうしたの？」と、自分の目を指差して首を傾げるお姉さんにハツとする。慌てて、潤んでいた目元をこしこしと擦った。

お姉さんはまたふんわりと笑っていた。夕焼けににじむ影みたいだと思った。なんだか少しだけ、爽太郎に雰囲気似ている。

「きみ、最近よくこの空き地にいる子でしょう？」

窓からよく見えてたよ、とお姉さんはわたしを真っ直ぐに見てくすくす笑った。爽太郎、ばれてたみたいだ。爽太郎のストーカー人生も今日でお終いだね、とここにはいない爽太郎に心の中で話し掛けてみる。

「この辺の子？」

「知らない人に住所を教えてちゃいけないの」

「ふふ、そうよねえ。きみの言う通りです」

サチコは、爽太郎よりいくつか年上に見えた。ふわふわとした巻き髪、甘い香水の匂い、清楚な純白のロングスカート。大人の女性。
…爽太郎は面食いだ。なんだか心臓がモヤモヤとした。なんでだろう、また泣いてしまいそうな気持ちになる。

「懐かしいなあ」

サチコが椅子を触りながら、いとおしそうに笑う。

とてもやわらかな笑い方だった。まるで大切な誰かを想っているかのようなどこまでもやさしいやさしい笑顔。わたし、この笑い方をする人、知ってる。

「私達がここで会ったのも何かの縁かもね」

「そうなの？」

「そっだよ、絶対そう！」

「…そうなのかな」

わたしの両手をそつと握って、きれいな笑顔を見せるサチコの後ろに見える椅子がギシリとさびしい音を立てた。
爽太郎、今日は来ないのだろうか。

「…ろく」

「ん？」

「わたしのあだ名。ろく」

「ろくちゃん？わあ、かわいい！」

「お姉さんは？」

「私は幸子。フツーの名前でしょ？」

ああ、やっぱりこの人はサチコだった。

「ねえ、ろくちゃん。今度はお友達も連れておいで？いつもひとりで遊んでいたら退屈でしょう？」

「え？」

「不思議だったんだ。いつもひとりでここにいるろくちゃんが楽しそうにコロコロ表情変えて笑っているのを、窓から見るとたびに」

「ひとり？」

ギシリ、椅子がまた壊れそうな音を出した。そこには、いつもの黒い瞳をやわらかく細めて笑っている爽太郎が姿勢悪く座って、わたし達を見ていた。

「ろくちゃん？」

「サチコ、さんには…あの椅子が見える？」

「うん、もちろん」

サチコが見つめる先には、確かに爽太郎がいるはずなのに。爽太郎はただ黙って、足をふらふらと揺らしながらサチコを見つめている。

「あの椅子ね、昔私が使ってたものなんだけれど…あんなになってもまだ捨てられないんだ。なんでだろうね？」

愛着とか思い出があるからかな？と、サチコは伏し目がちに微笑んだ。

「じゃあ、ろくちゃんまたね。暗くならないうちにお家に帰らないとだめだよ？」

白のスカートをひらひらと揺らしながら、サチコは爽太郎と一度も目を合やすことはなく、コーヒー牛乳色の家に帰っていった。

爽太郎がわたしの名前を呼ぶ。カーディガンのポケットから取り出したふたつのビー玉を自分の目の位置にかざして、おどけてみせた。

「な？あいつ、かわいいだろ？」

サチコにしか見せないあの表情を得意げに見せて、笑った。ねえ爽太郎。爽太郎は何者なの？

「俺は、ストーカーなんだよ」

ねえ爽太郎。

わたし、まだなんにも爽太郎のこと知らないね。

夕方にしか現れない理由も、真夏なのに長袖のカーディガンを着ているのも、どうしてサチコが好きなのかも、どうしてサチコには爽太郎が見えていなかったのかってことも、なんにも知らない。ねえ爽太郎、教えてくれる？

「しょうがないなあ。…ろくちゃんにだけ特別だよ？」

ビー玉が夕焼け色の影をつくつて、やさしく笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5291o/>

Y氏に告ぐ

2010年12月25日23時12分発行